

画文集 photo - essay

旅の空の下で 2



アイルランド ヴァレイマウント にて



風の国アイルランド 1

ダブリン(Dublin)の午後

今夏、初めてアイルランドを訪ねた。日本からの直行便はなく、オランダのアムステルダム経由で首都ダブリンに着いた。これは翌日、街歩きの際とった写真。街を東西に貫流するリフィー川の橋から上流をとったもの。左の道を行く2階建てバスが、英国の影響を受けた国らしい。

アイルランドは風の国。絶えず吹く西風が天気を不安定にさせ、一日のうちに晴れあり、雨あり、曇りありと忙しい。まだ午後早い時刻なのに、この憂いをもよおす鼠色の空も、いかにもアイルランドと言った雰囲気だ。この国へ行く前、アイルランドは雨の国だとは思っていた。だから傘は用意した。いざこの国に着てみると、雨よりも風が強いのに閉口した。

ダブリンは、ジョナサン=スウィフトを生んだ街だ。あの『ガリバー旅行記』の作者である。この人が坊さんとして説教していたのが、名刹聖パトリック(Patrick)教会だ。この聖堂がカトリック教でなく英国国教会の寺院であることが、英国との因縁浅からぬ関係を物語っている。



風の国アイルランド 2

ゴールウェイ(Galway)市の夕刻

着いて三日目。車を借りてアイルランドを東西に横断した。途中修道院の廃墟クロマクノイズ(Clonmacnoise)に寄った後、西海岸のゴールウェイという港町に至った。英国と変わらぬ郊外の小奇麗なB&Bに宿をとり、夕刻の町に出てみた。港は見えないが、その港の入り口付近、中世の雰囲気漂う一角をとらえたもの。

この街のお目当てはシーフード。それも9月から本場の生牡蠣(かき)だ。市中の駐車場に車を止め、コンロンズ(Conlons)というレストランで早速試してみた。ただし食中毒を避けるため、ベーコン巻きの焼がきにした。美味だった。

このレストランで関西弁の日本人夫妻と隣り合わせになり、話し込んだ。二人の話だと、欧州でも最果てと言って良いこの国に、今夏日本人は大挙して来て、沖合いのアラン(Aran)島で見かけるのも日本人ばかりと聞いた。

それにしても風が強い。この夜、街中のスーパーでスペイン製の分厚いフリースを買うことになった。



風の国アイルランド 3

ヒッチ・ハイカー

ゴールウェイの北西にあるコネマラ (Connemara) 地方の名勝カイルモア修道院を訪ねた後、既に午後も遅いので国道59号を東へ向かい沿道で宿探しをした。どこも希望の部屋と値段で折り合わず、次へと向かう時、目の前にヒッチ・ハイカーが現れた。タイミングが合い過ぎた。思わず車を止め、乗せてやることにした。

この青年の名はキディックとか言う。フランス人だった。それもアイルランドと同じケルト人の血を引く、ブルターニュ半島のブルトン人だと言っていた。先祖の血が騒ぐのか、半月前からこの国を旅しているという。次に寄ったキャンプ場に空きがあり、そこで降ろしてやった。そこで私も部屋がないかと聞いたら、テントだという。この荒天と寒さではかなわない。青年とはここで別れることにした。別れ際に一枚、この写真をとった。

今回の旅では、次の日もドライブの途中、雨でずぶぬれのヒッチハイクの中年男性を拾った。米国のボストンからと言う。こんな経験は、私も初めてである。



風の国アイルランド 4

変な、噴水

ヒッチ・ハイカーの青年と別れた後、車窓の左側にアイルランド唯一のフィヨルド(氷河に削られた入り江)と言うふれ込みのキラリー湾が現れた。無人の荒野の奥にその湾に面してリナウン (Leenaun) の村があった。ここで宿が取れないと困る。民宿はもういっぱい、結局この村唯一のリナウン・ホテルに部屋をとった。

部屋に入れば静かだが、外は相変わらず荒天で、風と雨が荒れ狂っていた。まるでブロンテの『嵐が丘』の世界である。ホテルと銘打つだけあって、海側にはバラの咲く西洋庭園があった。そこに出て見ると、この噴水が海沿いに建っていた。この風では水が下の水盤には落ちない。あおられた水でこちらがびしょびしょになる。庭園をめぐるのもそこそこにホテルに戻り、ロビーにあった泥炭の鈍い炎が独特な暖炉でしばし暖をとった。

実はこの噴水の写真、職場のパソコンの壁紙にしておいた。そこで同僚に言われた。あの「変な噴水の写真」が貼ってあるパソコンと。ごもつともごもつとも。



風の国アイルランド 5

ロック・オブ・キャッシュル(Cashel)

この国の南東部、マンスター州の内陸部、ティッペラリー平原のほぼ中央にキャッシュルの町がある。ロック・オブ～と呼ぶのは、この街を見下ろす高岩の上に中世以来の城砦跡があり、そこに教会や修道院の廃墟が孤高にそびえているものを言う。午後遅くに鉄道も通わぬこの田舎町に着き、宿から歩けるこの丘に登った。すでに日は傾き、何となく寂しさが漂う城内に入ると、眼前に広大な牧野の広がりが見えた。はっとするほど美しく、どこまでも見通しのきく光景だった。

大地の広がりには、ロック・オブ～が抜群のロケーションに建てられた要塞だったことを示す。同時にどこからも見通せた丘上の建物は、宗教的権威として格好の場であった。5世紀には聖パトリックが、マンスター王をキリスト教に改宗させている。12世紀からは、司教のコーマックが今に残る聖堂の建築に着手した。14世紀、ペストに苦しむ人々はここで神に許しを請うた。キャッシュルの歴史は17世紀、クロムウェルの征服まで続いた。



オランダと言う国 1

その昔、海だった・・・

私は、しばしばオランダに行く。前は、2007年の夏、アイルランド行きに帰りに寄った。ヨーロッパに行く時、お気に入りのKLMオランダ航空をなるべく利用する。それで、立ち寄ることが多い。空港は、アムステルダム・スキポール空港。オランダの空の玄関口だ。

ところで、この写真。空港に降りようとする所を、窓外にカメラを向けてとった。ただの平野と言うわけではない。畑地・牧草地を見ると、まったく起伏がなくどう見てもまっ平らだ。それもそのはず、海から大分内陸に入ったこの空港周辺も、実は「干拓地」であり、その昔は海だったところだ。もし万が一、海水が浸入でもしたら、この大地は一面水浸しになってしまう。空港の海拔は-6mと聞いた・・・。

言い古された話だが、「神がこの大地を創造された。しかし、オランダの大地はオランダ人が海と闘いながら、その手によって造られた」のだと言われる。



オランダと言う国 2

シーボルトと言う人

日本史をかじったことのある人なら、江戸時代の長崎に滞在したシーボルトのことを知らない人はないだろう。この人が長崎・出島のオランダ商館に医師として派遣されたのは、1823年からのわずか5年間。しかし、この日本と言う国がよほど物珍しかったのか、様々な資料をヨーロッパに持ち帰ることになった。

元々、ドイツのヴュルツブルクに生まれたドイツ人だが、オランダ政府に雇われての来日だった。そのため欧州へと戻っても、その住まいはオランダの小さな街ライデンにあって、この地で一生を終えることになった。2007年のオランダ行きでは、空港の鉄道駅から列車でわずか30分のこの街に寄り泊まって見た。

街の中心にシーボルトが暮らした住居が博物館として残っていた。3階建ての豪壮な館で、建物に入るとそこだけが日本語の空間に戻ったような、日本滞在中のコレクションで構成された施設だった。

そして中庭に、この銅像が建っていた。



オランダと言う国 3

シーボルトの旧宅で

シーボルトの館には愛知県の矢作(やほぎ)川にかかっていた木橋の精巧な模型から、女性が髪結いに使った櫛などの小物まで、いろいろと揃っていた。館の3階は展示スペースではなく、東洋の美術品を扱う商社のオフィスになっていた。ここがいかにもオランダらしい。土地が狭い割に人口が多いこの国では、早くから外国貿易で稼ぐことが産業の中心になっていた。江戸時代にわざわざ日本との貿易を維持したのも、商業こそ国の礎だったからだ。

ところで、館はこれまたオランダらしく運河に面している。そしてレンガでできた建物が軒を寄せる。オランダの街で見かけるのは、この運河とレンガ建ての建物で、この二つが揃えばオランダと言えるくらいだ。建物の間口が狭いのも、どこの街でも同様だ。なぜなら、固定資産税をはかるのに、その間口の長さで額を決めていたから……。間口は狭く奥に長い区画が当たり前となった。



オランダと言う国 4

ライデン(Leiden)の街

ライデンはオランダの古都。歴史ある都。画家のレンブラントがこの街の出身で、オランダ最古のライデン大学の所在地だ。歴史家のヨハン=ホイジンガが教鞭をとっていた。またこの学び舎で過ごした人も数知れない。戦後日本で最も有名なアメリカ大使と言えば、やはり歴史家でもあったライシャワー氏だろう。ライシャワー大使が学生時代に学んだのも、このこじんまりした街の大学だった。

街の中心にあるのは聖ピーテル教会。写真奥の尖塔がそれだ。手前の路地には、アメリカの歴史に関わる建物が今も残っている。1620年、アメリカに渡るピューリタンが一時寄留したのが、この館。彼らはイングランドからこの地に来て、自由な新天地を求めるための準備をした上で、北アメリカを目ざしたという。当時、オランダはキリスト教でもカルヴァンの流れを引く改革派の拠点だった。その時代の勢いが、彼らを命がけのメイフラワー号によるアメリカ行きへと駆り立てた。



オランダと言う国 5

スキポール空港の SUSHI BAR

最近はずっかり国際食になったお寿司。ここアムステルダムの国際空港にも、ピアと呼ばれる搭乗口の手前の土産物屋などが並ぶところに、このスシ・バーが開いていた。商売上手なオランダ人は、この空港に何でも用意している。特産のチューリップの球根(検疫済み)から免税が受けられる乗用車のブースまで品揃えをしている。食事にもヴァリエーションをと言うのだろうか、日本人の板さんを雇ってすし好きなお客を迎えている。

当のオランダ人はどうかと言うと、おそらく西洋人で最も魚類には親近感をもっている国民なので、好きな人が多いだろう。ヨーロッパを旅していて、伝統的な町並みの中にフィッシュ・マーケット(魚市場)が残っている国の一つがこのオランダだ。先のライデンには、17世紀の魚市場の跡が、市街の運河をまたぐように、今も記念建造物として建っている。オランダ人は、酢漬けのにしんやムル貝、そしてかきなどが好物だそうだ。



湖北長浜と竹生島 1

月と伊吹山

私は水のある所が好きだ。オランダに親しみを覚えるのは、人々の集まる街に運河が張り巡らされ、水の潤いを感じられることもある。

日本でも近江の国は、琵琶湖を擁し、人々の生活の中心に水があると言って良い所だ。なかなか行くチャンスがない中で、2007年の秋11月、その湖北へと足を向けた。紅葉も目当てにして新幹線で米原まで行き、長浜市をめざした。

その長浜に着いた日の夕刻、東の空に雪をいただいた伊吹山を眺めることができた。海拔1377m。湖北のシンボルと言って良い山だ。伊吹山で思い出すのは、若い日に正月の関西を訪ねた時、早朝の関ヶ原を新幹線を通った時のこと。すでに全山が白銀の世界で、こちらに向かって降りるスキーヤーの姿を遠目に眺めることができた。新幹線の車窓でも、この地域だけが冬に豪雪に見舞われる。おかげでこの区間だけ、新幹線の鉄路には消雪設備がそなわり、伊吹山スキー場の賑わいまで見ることができるのだ。



湖北長浜と竹生島 2

北国街道の安藤家住宅

湖北長浜は、戦国時代の16世紀後半、羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)が当時今浜と呼ばれた琵琶湖畔のこの地に長浜城を築いて以来、その城下町として発展し今日に至っている。琵琶湖の東岸に沿って京の都から北陸へと延びる北国街道が走るが、長浜はその途上にも位置する。

琵琶湖の水運も含め、商業が隆盛した。おかげで豪商が街を取り仕切る伝統も生まれ、秀吉が着て以来、町衆は十人の代表者によってこの街を治めた。その一人が豪商の安藤家で、北国街道沿いにその住まいも残されている。

典型的なこの地の町家で、2階の窓には虫籠窓(むしごまど)という縦のさんが入っている。そして1階の道沿いには紅殻格子(べんがらごうし)が、往来の視線を中に入れぬよう工夫して施してある。中に入ると、奥の庭には色づいた見事な紅葉の植え込みが、曇り空の下で彩りを添えていた。その落ち着いたたたずまいが気に入ったが、残念ながら、昨年をもって公開をとりやめたそうだ。



湖北長浜と竹生島 3

黒壁スクエアの土蔵

現代の長浜は、近畿圏からわずかに北に外れ、日本の地方都市によくある衰退した中心商店街をかかえる町だった。だったというのは、今はその町おこしにある程度成功し、平日でも賑わいのある観光地へと変わって来ているからだ。

その中心は黒壁スクエアと呼ぶこの写真の右奥、四つ角に立つ旧第百三十銀行の建物で、ここに目をつけた実業家がガラス工芸品を作り売り出す拠点として活用し始めた所から、地方都市「長浜」の再生は始まった。黒壁とは以前はこの壁が黒く、黒壁銀行と呼ばれた所から来ている。その周りにガラス工芸品のお店が集まり、今流行のガラス製作の体験教室まで備えている。狙いは近畿圏のおしゃれな若い女性なのだろう。しかし、中年のご婦人などにも人気である。京都・大阪からの日帰り旅行には格好の場所だ。

写真中央から左側の土蔵は、蚕糸業が盛んだった頃の糸蔵だそうで、色あせた板壁の雰囲気は素敵だった。中には「ヴェリタ」というイタ飯屋が入っている。



湖北長浜と竹生島 4

長浜曳山会館にて

羽柴秀吉が浅井氏の小谷城からここ長浜に移ったのが1774年、それから間もなく男子が誕生しそれに喜んだ秀吉が城下の町衆に金一封を配った時、町衆が相談してこの祭礼用の曳山(ひきやま)を各町内で造ったと言う。

日本の地方にはこうした山車(だし)を使ったお祭りが各地に残されている。しかし、その祭りは年に一度しか行われぬ。長浜曳山祭りは毎年、湖北に春が訪れる4月中旬に催される。街の東側、長浜八幡宮の例大祭の際に、ひき回されるものだ。京都の祇園祭の影響からか、化粧を塗った可愛い稚児(ちご)が登場する「子供歌舞伎」が上演されるので有名だ。

豪華な山車を祭り期間だけしかお披露目できないのはもったいないと、代表的な二基の山車を曳山会館に収めている。そう言えば、この手の会館は日本全国に分布する。近くは、秩父市の夜祭に繰り出す山車も展示館に納まっていたし、九州の唐津おくんちの山車も祭り期間外は、こうした会館に収まっていた。



湖北長浜と竹生島 5

マキノから竹生島を眺める

さて、竹生島である。「ちくぶじま」と呼ぶ。今回の旅の目的地の一つが、この琵琶湖の奥、湖北に浮かぶ孤島竹生島だった。なぜ行きたかったか。もちろん風光明媚な場所だったから。しかしこの島の価値は、湖にぽつんと存在するその「自然の配置」とでも言おうか、特異なロケーションのせいにある。

周囲の水は清浄なイメージをこの小さな空間にかもし出す。そのため、島は聖なる場としていかされる。竹生島の場合、かつては神仏混交だった宝厳(ほうごん)寺と都久夫須麻(つくぶすま)神社が南側の斜面に寄り添って建立されている。寺院はその起源を奈良時代に遡ると言う。

長浜からも船があるが、今回は着いたその日に車で琵琶湖北岸を西へと回り、マキノの浜沿いにあるプリンス・ホテルに泊まった翌朝、ホテルの棧橋から行くことにした。

写真は、夜が明けたその浜から日がさして来た竹生島を遠望したところ。波立ぬ湖は、静けさをたたえている。



湖北長浜と竹生島 6

巡礼の島の港にて

マキノからの船に乗り合わせたのは、前夜からホテルに泊まっていた何組かの家族連れと、出発間際にマイクロバスで乗りつけたお遍路さん姿の団体一組だった。船は波も立たぬ湖水を30分ほどかけて、竹生島にたどりつく。周囲2キロほどの小さな島は全山が樹木におおわれているが、花崗岩からなっているため、樹木の合間から白い岩肌が露出しているところも見かける。

竹生島宝厳寺は、西国三十三観音霊場の三十番目の札所となっている。そのため、この日も島の港は朝からお遍路の団体客でにぎわっていた。行きの船に乗り合わせた団体のように、棧橋までバスで乗りつけ、急いで島へと達した後、般若心経を唱えながら風のように島を去り、湖東をめざすお遍路さんもいる。残る札所は三つとあって、最後の一息といった感じなのだろう。

この日は天気にもぐまれ、湖水を日の当たる側に見る神社の高台からは、その鳥居を眩い光の中に見ることができた。



湖北長浜と竹生島 7

湖北の秋、石道寺・鶏足寺

旅の最中は紅葉の真っ盛りだった。湖北から若狭を回った後、再び長浜をめざして南下した。木之本町の東側の山ひだに、紅葉と観音菩薩(ぼさつ)で知られた幾つかの寺院があった。臨時駐車場に車を止め、歩いて出かけた石道寺。山間の素朴なお寺だった。元はさらに東に山奥へと入った所にあったというが、無住となりその観音様を守るために麓へと移築され現在に至っている。

紅葉狩りの観光客にあわせたのか、そのご本尊である木彫の観音菩薩が公開されていた。これも素朴なもので、ケヤキを彫った一木造りなのだそう。表情は優しく、柔和な印象だった。写真はその裏山を歩き、隣の鶏足寺への参道でとった一枚。赤黄白の彩が気に入った。

湖北の東にはこうした仏を安置した寺院が多い。その理由の一つが、湖南坂本の比叡山の存在だったという。琵琶湖の船運を使って仏師が往来した。そうした歴史と伝統の中にこうした仏も位置づけられるという。